

(七) 江戸長唄

高尾懺悔

五本

内侍所都入

(八) 荻江

金屋丹前

八本

一、一中節

十代目都太夫一中事
邦楽調査掛囑託 伊藤 榎太郎

八島

(四本)

松羽衣

邦楽調査掛囑託 宇治紫交事
文化年中 花里揚吉
初代菅野序遊作曲 都 圓中事

(九) 菌八

鳥邊山

六本

初代菅野序遊作曲

邦楽調査掛囑託 都 圓中事
四代菅野序遊事 島田傳吉

(十) 説教

以上總計 壹百八拾本ノ豫定

四本

(手書き)

邦楽調査掛囑託 菅野吟平事
邦楽調査掛囑託 上調子 西山 龜助

(七) 演奏会

邦楽調査掛関係者による演奏会は、回数を超した定期的な邦楽演奏会が明治四十年十二月より大正二年十二月まで七回開催され、それ以降は大正十年まで臨時の四回のプログラムが残る。明治四十四年五月に行つた「奨学金募集」の演奏会は調査費用の寄付を募るために企画された「議事録」(四十四年四月二十八日)。なお大正四年に、三味線各流の保存・発展を図り、邦楽調査掛主宰ではないが掛長の發議で関係の家元たちによつて「邦楽會」が組織されており(二月二十三日發議、決定。第一回演奏会を五月二十六日に開催)、事務所を邦楽調査掛に置いて事實上邦楽調査掛関係者が運営に当たつた。
ほかに演奏者などを招聘した演奏・講演が行われている。

一、富本節

御代榮益穂富種 六代名見崎徳壽齋事
文政年中 邦楽調査掛囑託 三弦 吉野萬太郎
二代富本豊前太夫作曲 名見崎とく事 上調子 名見崎 夕カ子

一、清元節

青海波 五代清元延壽太夫事
明治三十年 邦楽調査掛囑託 岡村庄吉
永井素岳作歌 二代清元家内太夫事
五代延壽太夫作曲 清元志免太夫事 牧野熊吉
佐野松藏

定期的演奏会 (邦楽演奏会第一回〜第七回)

第一回邦楽演奏會曲目 (明治四十年十二月二十一日)

一、平曲

邦楽調査掛囑託 館山漸之進

一、長 唄

壽
猫の妻
めりやす
びんづる
四ツの袖

明和安永時代之作曲

邦楽調査掛囑託

邦楽調査掛調査員

六代芳村伊十郎事
長唄 鶉 澤 徳 藏

十三代杵屋六左衛門事
三弦 杵家六左衛門

三代岡安喜代八事
長唄 藤田久太郎

五代杵屋勘五郎事
三弦 石原 廣 吉

今井慶松事
教授 今井新太郎

千布豊勢事
千布 とよ

一、箏 曲(組合セ)

羽 衣 八橋檢校作曲
菜 蔭 北島檢校作曲

高橋榮清事

高橋源太郎

山室千代事

山室千代

一、踊

連 獅子

文久元年
河竹其水作歌
杵屋勝三郎作曲

二代藤間勘右衛門事

藤間勘右衛門

藤間藤藏事

田中亥之吉

六代芳村伊十郎事

長唄 鶉 澤 徳 藏

初代中村飄二事

長唄 吉田貞次郎

十三代杵屋六左衛門事

三弦 杵家六左衛門

三代岡安喜代八事

長唄 藤田久太郎

邦楽調査掛囑託
五代杵屋勘五郎事
三弦 石原 廣 吉

五代岡安喜三郎事
三弦 幸田菊次郎

初代望月太喜藏事
笛 淺 井 齋

七代望月太左衛門事
小鼓 安倍清左久

初代柏 扇吉事
大鼓 赤田禮三郎

五代六合新三郎事
太鼓 細谷侘太郎

第二回邦楽演奏會曲目(明治四十一年十二月二十一日)

一、平 曲
木曾最期
邦楽調査掛囑託
館山漸之進
館山 甲 午

一、一 中 節

高砂松の段

邦楽調査掛囑託

四代目菅野序遊事
シテ 菅野藤次郎

菅野利三事
ワキ 菅野平太郎

都仙卜事
三絃 伊藤 榎 太郎

邦楽調査掛囑託
菅野吟平事
上調子 西山 龜 助

一、富本節

奈須野

邦楽調査掛囑託

名見崎友喜事
山田 ゆき
六代名見崎徳壽齋事
三絃 吉野 萬太郎
名見崎とく事
上調子 名見崎 タカ子

一、箏 曲

茶おんど

邦楽調査掛調査員

今井慶松事
教授 今井新太郎
飯田松連事
飯田 豊
高橋榮清事
高橋源太郎

一、長 唄

京鹿子娘道成寺

附(三段祈り)

邦楽調査掛囑託

六代芳村伊十郎事
長唄 鵜 澤 徳 藏
五代富士田音藏事
長唄 關谷 織三郎
十三代杵屋六左衛門事
三絃 杵家 六左衛門
三代岡安喜代八事
長唄 藤田 久太郎
五代杵屋勘五郎事
三絃 石 原 廣 吉
五代岡安喜三郎事
三絃 幸田 菊次郎
二代望月太喜藏事
笛 淺 井 齋
七代望月太左衛門事
小鼓 安倍 清佐久
初代柏扇吉事
大鼓 赤田 禮三郎
五代六合新三郎事
太鼓 細谷 佶太郎

一、清元節

色彩間苜豆

邦楽調査掛囑託

五代清元延壽太夫事
岡村 庄 吉
二代清元家内太夫事
牧野 熊 吉
清元喜久太夫事
狩野駒之助
二代清元藤吉事
三絃 大高藤二郎
清元藤三事
上調子 梅 澤 清 一
十五代中村明石事
シテ 中村 明 石
四代中村勘五郎事
ワキ 岩 城 米 吉
六代芳村伊十郎事
唄 鵜 澤 徳 藏
十三代杵屋六左衛門事
三絃 杵家 六左衛門
三代岡安喜代八事
唄 藤田 久太郎
十二代杵屋喜三郎事
唄 杵家 安彦

一、猿若狂言

第三回邦楽演奏會曲目(明治四十二年十二月十八日)

一、平 曲

八坂(流)訪月

邦楽調査掛屬託 館山漸之進

五代杵屋勘五郎事
邦楽調査掛屬託 三絃 石原廣吉

一、常磐津節

蜘蛛絲梓弦

六代常磐津文字太夫事
邦楽調査掛屬託 常岡丑五郎

一、河東節

助六所縁江戸櫻

十一世閑室、十寸見秀翁事
邦楽調査掛屬託 伊東秀次郎

山彦錦子事
三味線 村山さん

山彦久子事
上調子 柳澤ひさ

一、清元節
長唄掛合

五代清元延壽太夫事
邦楽調査掛屬託 岡村庄吉

一、一中節

尾上の雲賤機帯

十代都太夫一中事
邦楽調査掛屬託 伊藤株太郎

宇治紫好事
花里揚吉

菅野利三事
菅野平太郎

邦楽調査掛屬託
四代菅野序遊事
三味線 菅野藤次郎

邦楽調査掛屬託
菅野吟平事
上調子 西山龜助

一、富本節

拙筆力七以呂波
乙姫

邦楽調査掛屬託
六代名見崎徳壽齋事
三味線 吉野萬太郎

名見崎とく事
上調子 名見崎夕カ子

名見崎友喜事
板倉ゆき

邦楽調査掛屬託
五代杵屋勘五郎事
三味線 石原廣吉

第四回邦樂演奏會曲目(明治四十三年十二月十七日)

一、平 曲

邦樂調查掛囑託 館山漸之進

小祕事

祇園精舎

一、一 中 節

邦樂調查囑託 シテ 菅野藤次郎

勸進帳

邦樂調查囑託 ワキ 伊藤椽太郎

菅野利三事
菅野平太郎

邦樂調查囑託 菅野吟平事
三味線 西山龜助

都一濱事
三味線 川崎カツ

一、富 本 節

草枕露の玉歌和

(玉川)

邦樂調查囑託 六代名見崎徳壽齋事
三味線 吉野萬太郎

富本都喜代事
上調子 坂田とく

杵屋榮藏事
三味線 小田榮次郎

同 杵屋長三郎事
野津定吉

一、常磐津節

戀鼓調懸畏
(女夫狐)

六代常磐津文字太夫事
邦樂調查囑託 常岡丑五郎

二代常磐津都太夫事
天野孫一郎

常磐津若喜太夫事
伊藤慶次郎

常磐津藤兵衛事
三味線 本多金太郎

常磐津菊之助事
上調子 荒井保次郎

一、清元節

榮能春延壽
(長生)

五代目清元延壽太夫事⁽¹⁾
邦樂調查囑託 岡村庄吉

二代清元家内太夫事
牧野熊吉

二代清元喜久太夫事
狩野駒之助

二代清元梅吉事
三味線 松原梅吉

清元梅三郎事
上調子 松原清一

一、踊

再春松種蒔

二代藤間勘右衛門事
三番叟 藤間勘右衛門

藤間藤藏事
千歳 田中猪之吉

六代芳村伊十郎事
長唄 鵜澤徳藏

二代中村兵藏事
長唄 太田永太郎

邦樂調査囑託
五代杵屋勘五郎事
三味線 石原 廣吉

墨繪の島臺
(江の島)

五代富士田音藏事

長唄 關谷 織三郎

邦樂調査囑託

菅野利三事
ワキ 菅野 平太郎

五代岡安喜三郎事

三味線 幸田 菊次郎

邦樂調査囑託

都仙卜事
三味線 伊藤 樺太郎

杵屋榮藏事

三味線 小田 榮次郎

邦樂調査囑託

都一濱事
上調子 川崎 カツ

望月太喜藏事

笛 浅井 齋

邦樂調査囑託

六代常磐津文字太夫事
二代常磐津志妻太夫事
常岡 丑五郎

五代六合新三郎事

小鼓 細谷 佶太郎

邦樂調査囑託

常磐津彌生太夫事
山本 彦太郎

六合新十郎事

大鼓 藤原 勇次郎

邦樂調査囑託

三代常磐津八百八事
三味線 鈴木 廣太郎

柏房吉事

太鼓 赤田 源次郎

邦樂調査囑託

二代常磐津壽助事
上調子 加藤 萬太郎

(1) 清元延壽太夫病氣休演のため、長唄「執着獅子」に変更された。

一、大薩摩節

不動

邦樂調査囑託

十三代杵屋六左衛門事
三味線 杵家 六左衛門

第五回邦樂演奏會曲目 (明治四十四年十一月二十五日)

一、河東節

筆始四季の探題

邦樂調査囑託 伊東 秀次郎

十一世閑室

十寸見秀翁事
伊東 猛次郎

山彦錦子事

三味線 村山 きん

一、富本節
幾菊蝶初音道行
(忠信)

邦樂調査囑託

富本豐事
住田 つる

四代目菅野序遊事

シテ 菅野 藤次郎

一、一中節

邦樂調査囑託

邦樂調査囑託

六代名見崎得壽齋事
三味線 吉野 萬太郎

名見崎多賀事
上調子 名見崎 タカ子

一、清元節

玉兔月影勝
(玉兔)

五代目清元延壽太夫事
岡村庄吉⁽¹⁾

二代清元家内太夫事
牧野熊吉

清元千歳太夫事
東庄藏

三代清元梅吉事
三味線 松原清一

清元吉太郎事
上調子 辻 精之助

花柳徳太郎事
田代徳太郎

二代花柳壽輔事
花柳芳三郎

中村永五郎事
長唄 吉田貞治郎

岡安喜八事
同 後藤伊三郎

今藤長十郎事
三味線 坂田政太郎

杵屋勝藏事
同 中谷彌三郎

錦見松次郎事
笛 錦見松次郎

五代六合新三郎事
小鼓 細谷侘太郎

六合新十郎事
大鼓 藤原勇治郎

望月太左吉事
太鼓 白川清太郎

(1) 清元延壽太夫病氣休演のため、長唄「鶴龜」が臨時演奏された。杵屋六左衛門も病氣休演であった

第六回邦楽演奏會曲目 (大正二年六月二十一日)

一、富本節

年朝嘉例壽
(長生)

邦楽調査囑託 三味線 名見崎 得壽齋

上調子 名見崎とく

富本 豊

一、一中節

大江山 衣洗

邦楽調査囑託 シテ 都太夫 一中

邦楽調査囑託 ワキ 菅野 序遊

ツメ 菅野 利三

邦楽調査囑託 三味線 菅野 吟平

三味線 都一 濱

一、長唄

時雨西行

長唄 吉住小三郎

同 吉住小三郎

同 吉住小四郎

三味線 杵屋六四郎

同 杵屋政次郎

上調子 杵屋和三郎

一、清元節

春夜障子梅
(夕霧)

邦楽調査囑託 清元延壽太夫

清元千歳太夫

清元喜久太夫

三味線 清元 梅吉

上調子 清元吉太郎

一、新内節
 邦樂調査囑託 富士松加賀太夫
 三味線 吾妻路宮古太夫
 明烏夢泡雪

一、踊 (常磐津かけ合)
 長唄

後の月酒宴島臺
 (角兵衛)

邦樂調査囑託
 角兵衛 花柳徳太郎
 鳥追 花柳壽々香
 常磐津文字太夫
 常磐津志妻太夫
 常磐津彌生太夫

三味線 常磐津 八百八
 上調子 常磐津 和歌吉

邦樂調査囑託
 長唄 芳村孝次郎
 同 芳村孝之助
 同 芳村孝藏
 三味線 今藤長十郎
 同 杵屋勝藏
 同 杵屋榮次郎
 同 柏崎林之助
 小鼓 六合新三郎
 大鼓 六郷新吉
 太鼓 望月太左吉

一、一中節
 邦樂調査囑託 淨瑠璃 都太夫 一中
 邦樂調査囑託 三味線 菅野序遊
 松盡し

一、常磐津節

四天王大江山入
 (古山姥)

邦樂調査囑託 常磐津文字太夫
 常磐津彌生太夫
 常磐津鳴渡太夫

三味線 常磐津文字兵衛
 上調子 常磐津 菊三郎

一、上方歌 (地唄)

十三鐘

小手出とい

一、富本節

百夜菊色の世中
 (關寺小町又は檜垣)

富本 豊

邦樂調査囑託 三味線 名見崎 得壽齋
 上調子 名見崎 徳

一、新内節

歸咲名残の命毛
 (尾上伊太八)

邦樂調査囑託 富士松加賀太夫
 三味線 吾妻路宮古太夫

一、江戸長唄

嫩染分紅葉
 (うはなり)

長唄 松島庄十郎

邦樂調査囑託 三味線 今藤長十郎
 同 杵屋五三郎

邦樂調査囑託 小鼓 六合新三郎
 大鼓 梅屋福之助

一、踊

白拍子 花柳壽々香

第七回邦樂演奏會曲目 (大正二年十二月十四日)
 一、本手琉球組
 邦樂調査囑託

山口菊次郎

道行面影草
(道成寺道行)

邦樂調査囑託

常磐津文字太夫

常磐津彌生太夫

常磐津鳴渡太夫

三味線

常磐津文字兵衛

上調子

常磐津 菊三郎

〔東京音楽學校一覽 從大正三年至大正四年〕二一〇—二一九頁

演奏会は第六回演奏会で初めて一般公開された。左はその時の公演案内原稿。

東京音楽學校に於ては、毎年一回宛邦樂演奏會を開き、囑託員たる各流家元出演して其妙技を振ひしが招待券のみなりしを、今回一般好樂家の便を圖りて公演する事となりしかば、初めて此等の人々の希望を充たすを得る事となれり。而して來る廿五日午後一時より全校奏樂堂に於て右演奏會を開く筈なり。出し物は從來の顏觸の上に特に吉住小三郎一派の「時雨西行」を加へ、又踊としては常磐津長唄カケ合にて「角兵衛」を出す、之は文政十一年に中村座で常磐津長唄カケ合にて出したるものにて、慶應元年以後常磐津の踊にのみ出しかけ合は絶えたるを五十年振にて今回復興したるものなり。入場券は一等一圓五十錢二等一圓、銀座共益商社を始め市中重なる和洋樂器店にて賣捌す、猶當日會場入口にても賣捌す。〔手書き〕

〔邦樂調査掛關係書類 上〕

第五回演奏会では、「囃子ノ掛聲ヲ廢シテ試演スル事」〔議事録第貳〕

明治四十四年十一月七日として長唄『越後獅子』が演奏された。掛声廃止試演に關しては、左の記事のほか山崎樂堂の論考「長唄囃子に於ける掛聲の問題」〔音楽〕第三卷第二号 明治四十五年二月 四一—〇頁がある。

邦樂演奏會の新研究

十一月廿五日我校に催された秋季邦樂演奏會に於いて演じた長唄の鳴物の懸聲を止めて試演したのは、頗る有功な研究であつた。何しろ洋樂でいへばタクトなしのオーケストラであるから、演奏者自身が非常な困難を感じたことは勿論であつたらうが、これにより吾人はさしより左の四つの新研究の題目を發見した。

- 一、懸聲の有無の可否は歌曲そのものの性質によりて定まるものではあるまいか。
 - 二、懸聲の廢止は、立三味線及び鳴物即ち器樂が從來の重要位置を唄即ち聲樂に讓つて、聲樂が主となり器樂が客となるの大變革を來すものではあるまいか。
 - 三、懸聲の有無は歌曲の氣分や曲趣を變じ、從來華麗と見たものが、莊嚴の趣となるなどの變遷を見ずるものではあるまいか。
 - 四、懸聲の無くなつた爲めに、唄の節廻しが非常に鮮明に聽えて、鳴物のリズムも明確に聽えた。しかしコンダクターたるべき立三味線の懸聲まで省くといふ事は非常な疑問ではあるまいか。
- 細かな研究は固より一度位の試みでは出來もしないし、また輕卒な斷定も下されないが、とにかく吾人が聽いて直ちに感付いた事を言つたら、右様の面白い新研究の糸口を見付けたのである。故に、

隨に今度の邦樂演奏會は、その點に於て非常な有功な有益な演奏會であつたと信ずる。願くばかやうな眞面目な研究の試演會を折々開催して貰ひたいものである。

〔音樂〕第二卷第十二号 明治四十四年十二月 四(五頁)

臨時演奏會

(1) 能樂演奏會(大正三年一月十七日)

鉢木 梅若萬三郎 大倉繁次郎 寺井三四郎
 寶生新 三須平司 山脇和泉
 不見不聞

三輪 觀世元滋

龜井俊雄 山下博睦
 小早川靖二 大島元三郎

忠度 喜多六平太

大倉宣利 加藤賢吉
 越智茂平

安宅 金剛右京

龜井俊雄 加藤賢吉
 左竹征一郎

春日龍神 櫻間金太郎

大倉宣利 佐藤順造
 小早川清二 大島元三郎

融 野口政吉 野島信

川崎利吉 觀世元規
 幸五郎 一噌又六郎

半能 笏の舞

附祝言

〔東京音樂學校一覽 從大正四年至大正五年〕二二六(二二七頁)

(2) 御大體奉祝音樂演奏會(大正四年十二月二十三日)⁽¹⁾

生田流

講師 山口菊次郎

一、御代萬歲

蜂須賀 ハツネ

二、河東御代の秋
(二人翁)

山彦秀翁事

邦樂調查囑託 伊東秀次郎

江本舜平
 三味線 落合康惠

同 山彦かの子

上調子 山彦錦子

富本 豐

三、富本御代の秋
(二人翁)

三味線 名見崎得壽齋事

邦樂調查囑託 吉野萬太郎

上調子 名見崎多加

邦樂調查囑託 吉住小三郎

吉住小三郎
 吉住小四郎

四、長唄御代の秋
(二人翁)

三味線 杵屋六四郎事

邦樂調查囑託 杉本金太郎

杵屋長三郎
 杵屋六次

笛 住田又兵衛

小鼓 望月太左吉

五、御代萬歲
山田流

大鼓 望月長十郎
太鼓 望月仙右衛門
教授 今井新太郎
飯田松漣
中限不二子

講師 村田ミイ
講師 高橋勢以

三味線 高橋榮清
氣賀慶重

八、合唱

雲井仰げば

〔東京音楽學校一覽 從大正五年至大正六年〕一七八〜一七九頁

〔1〕「御代萬歲」(吉丸一昌教授作歌)、「御代の秋(二人翁)」(高野辰之教授作歌)は各流の邦楽調査掛囑託員に委嘱して新作された。作曲者は左記のとおり。

「御代萬歲」

(生田流) 山口菊次郎(山口巖) 講師

(山田流) 今井新太郎(今井慶松) 教授

「御代の秋(二人翁)」

(河東節) 伊東秀次郎(山彦秀翁)

(富本節) 吉野萬太郎(名見崎得壽齋)

(長唄) 吉住小三郎・杉本金太郎(杵屋六四郎)

(常磐津節) 常岡丑五郎(常磐津文字太夫)

(一中節) 伊藤榎太郎(都太夫一中)・菅野藤次郎(菅野序遊)

六、御代の秋
常磐津
(二人翁)

邦楽調査囑託 常岡丑五郎
常磐津文字太夫事

常磐津志妻太夫

常磐津彌生太夫

三味線 常磐津文字兵衛

上調子 常磐津 菊三郎

都太夫一中事

邦楽調査囑託 伊藤榎太郎

菅野序遊事

邦楽調査囑託 菅野藤次郎

菅野利三

菅野吟平事

邦楽調査囑託 西山龜助

都 一秀

上調子 都 一花

(3) 東京音楽學校邦楽演奏會 (大正九年十月九日¹)

第一部

舞人

樂師 奧好壽

同 多 久 每

同 辻 英 吉

同 奧 好 察

笙 樂師 多忠保

一 打球樂(舞樂)

(午後三時—同二十五分)

笙 藥師 兼 明

同 同 安倍 季 賴

同 同 安倍 季 功

同 同 東儀 俊 龍

同 同 東儀 民 四 郎

同 同 上 近 禮

同 同 豐 時 義

同 同 奧 好 義

同 同 辻 則 承

同 同 東儀 俊 義

同 同 多 久 元

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

同 同 多 忠 朝

五 越後獅子(江戸長唄)

(午後五時二十五分—同四十五分)

長 吉住 小 三 郎

唄 吉住 小 三 藏

吉住 小 四 郎

杵屋 六 四 郎

杵屋 和 三 郎

線 杵屋 六 次

笛 住田 又 兵 衛

小鼓 望月 太 左 吉

小鼓 望月 左 吉

太鼓 望月 長 十 郎

太鼓 望月 長 四 郎

(東京音楽學校邦樂演奏會プログラム)

(1) 当初のプログラム原稿には、長唄の前に梁田貞(演奏)による民謡「追分節」が組まれていた。

(4) 邦樂演奏會(大正十年十月二十九日)

曲 目

舞 人 樂 師 多 久 每

同 同 豐 時 義

同 同 辻 英 吉

同 同 奧 好 察

同 同 樂 師 多 忠 保

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

同 同 同 同 同

二 納曾利(舞樂)

(午後三時三十分—同四十五分)

管 方 「打球樂」ニ同シ

川崎 利吉 金春林太郎

大倉喜太郎 杉山 立枝

藤江 又喜

梅若萬三郎

野口貢五郎

三 船辨慶(能樂)

間

二部

吟龍虚空(尺八本曲)

荒木古童

納富壽童

ワキ

納富壽童

望月 寶生 新 小早川 靖二 坂本 伊佐吉
(東京音樂學校一覽 從大正十一年至大正十二年) 五八(五九頁)

(5) 獎學 邦樂演奏會 明治四十四年五月二十日(土曜日)
金募集 邦樂演奏會 明治四十四年五月廿一日(日曜日)

趣意書とプログラム。演奏順と演奏者に変更があり、二十一日には番外で清元節『初霞淺間嶽』が上演された。曲目の上部のアラビア数字は当日の演奏順、「」は休演、「」は代演を示す。

邦樂演奏會開催趣旨

拜啓今回我等同人相謀りて次に申述候趣意にて邦樂演奏會相開候間御贊助の程偏に奉祈候別儀には無之候得共邦樂に關する書物書留の類は他の文學書類と異りて同好者以外には全く用なきもの多く隨て湮滅し易く藝道に於ても同様にて雅純なるものは之を學ばんとする者少く古曲難曲は次第に跡を絶たんと致居り頗る寒心に堪へざるもの有之候因て此際右の資料を浪びざるの前に蒐集保存して後人の便を圖ることは洵に焦眉の急務と相考へ候處幸に先年來東京音樂學校に邦樂調査掛を置かれ此の方面の研究に努められ候へば演奏會収益全部を擧げて之を同校の獎學金中に寄附致し候へば自然我等の素志幾分か相達し候事と存じ候希くは四方博雅の諸彦微衷の存する所を諒とせられ陸續御來聽の程奉願候 敬白

明治四十四年五月

東京音樂學校邦樂調査囑託(いろは順)

山彦秀翁事 伊藤(東)秀次郎
都一中事 伊藤 榎太郎

發起人

杵屋勘五郎事 石原 廣 吉
菅野吟平事 西山 龜 助
常磐津文字太夫事 常岡丑五郎
清元延壽太夫事 岡村 庄 吉
名見崎得壽齋事 吉野 萬 太郎
菅野序遊事 菅野 藤 次郎

(二十日)

曲 目

2 一、常磐津節
忠臣藏 桃井館の段
常磐津文字太夫
常磐津妻太夫
常磐津彌生太夫
常磐津彌生太夫

1 一、富本節
新曲高尾饑悔
三味線 常磐津文字兵衛
上調子 常磐津 八百八
三味線 常磐津 和歌吉
名見崎 友喜
三味線 名見崎得壽齋
上調子 (鳥羽屋里清)
(名見崎志女壽)

3 一、京唄(上方唄)
砧
三味線 米川 親 敏
三味線 加藤 柔 子
三味線 替手

4 一、河東節
 一、中節 かけ合
 淨瑠璃 源氏十二段
 養

シテ 十寸見秀翁
 ワキ 十寸見東舩
 三味線 山彦 秀子

上調子 山彦 八重子
 シテ 都太夫 一中
 ワキ 菅野 序遊
 三味線 菅野 吟平
 上調子 都 一濱

5 一、清元節
 吉原雀

清元 延壽太夫
 清元 家内太夫
 清元 喜久太夫
 三味線 清元 梅三郎
 上調子 清元 吉太郎

6 一、大薩摩
 筑摩川

六左衛門 倅
 長唄 杵屋 喜三郎
 三味線 杵屋 六左衛門
 三味線 岡安 喜三郎

〔二十一日〕

曲 目

1 一、一中節
 泰平船盡

シテ 菅野 序遊
 ワキ 菅野 利三
 三味線 都 僊ト

2 一、河東節
 亂髮夜編笠

上調子 〔菅野 吟平〕
 (都 一濱)

山彦 山子
 山彦 蝶子
 山彦 濱子
 三味線 山彦 秀翁
 上調子 山彦 英子

3 一、富本節
 徒髮戀曲者
 (まつ風)

名見崎 志女壽
 名見崎 得壽齋
 三味線
 上調子 鳥羽 屋里清

8 一、清元節
 深山櫻及兼樹振
 (保名)

踊 藤間 政彌

清元 延壽太夫
 清元 家内太夫
 清元 喜久太夫
 三味線 清元 梅三郎
 上調子 清元 吉太郎

4 一、京唄(上方唄)
 東獅子

三味線 本手 加藤 柔子
 三味線 管手 米川 親敏

7 一、常磐津節
 釣女

〔常磐津文字太夫〕
 常磐津 志妻太夫
 常磐津 彌生太夫
 (常磐津 鳴渡太夫)

〔三味線 常磐津文字兵衛〕

三弦 常磐津 八百八

上調子 常磐津 和歌吉

長唄 芳村伊十郎

長唄 中村兵藏

長唄 杵屋喜三郎

長唄 松島庄十郎

三味線 杵屋六左衛門

同 杵屋五三郎

上調子 岡安喜三郎

笛 望月太喜藏

小鼓 田中傳左衛門

小つゞみ 望月仙右衛門

大鼓 望月長左久

清元壽々葉

清元葉南

清元葉滿

三味線 清元直葉

〃 清元綾葉

上調子 清元三葉

〔プログラム〕

演奏者招聘による研究的演奏会

「議事録」ほか関連資料より演奏年月日・種目・曲目・演奏者などを左にまとめて示す。

明治四十三年十月五日（水）於掛室／尺八演奏（山谷・蓬萊・巢籠・鈴墓）

富山県氷見郡国泰寺妙音教会組長廣岡妙了・西村彌市

明治四十三年十月二十二日（土）於奏樂堂／奥淨瑠璃演奏（八嶋ほか四曲）／赤井澤龍之市／二十八日に蓄音機に吹込む

奥淨瑠璃演奏会関連記事が『奥淨瑠璃調査記事（未定稿）』（手書き一冊。明治四十三年十一月廿日）としてまとめられている。目次内容は次のとおり。

「緒言・第一 奥淨瑠璃演奏記事（一）演奏迄の経過、（二）奥淨瑠璃の演奏、（三）奥淨瑠璃の保存附蓄音機蠟管吹込の詞章」・第二 奥淨瑠璃の研究に関する記事（一）奥淨瑠璃の由緒、（二）奥淨瑠璃合評、（三）奥淨瑠璃に関する諸新聞の記事」第一の（一）の内容は、議事録（明治四十三年七月五日、十月十一日～二十八日）に準據する。また第二の（一）は『音楽』（第二巻第一号 明治四十四年一月）に掲載された。

○「奥淨瑠璃の由緒」（後半を欠く。『音楽』での題名は「仙臺淨瑠璃の考」。三頁～一四頁）

○「合評」（評者は高野辰之・永井素岳・幸堂得知・本居長世・三宅延齡・竹内平吉。四三頁～五頁）

明治四十三年十一月十日（木）琉球歌演奏（十二日に作田節他三曲を蓄音機に吹込む）

本校奏樂堂にて、沖繩人金武良仁氏の琉球歌の演奏ありたり。當日の次第左の如し。

一、琉球歌につきて

文學士 東恩納寛惇

一、演奏曲目

5 一、清元節

初霞淺間嶽

6 一、長唄

観進帳

（番外）

5 一、清元節

初霞淺間嶽

三味線 清元直葉

〃 清元綾葉

上調子 清元三葉

〔プログラム〕

一、演奏曲目

文學士 東恩納寛惇

一、演奏曲目

5 一、清元節

初霞淺間嶽

6 一、長唄

観進帳

（番外）

一、コテイ節（本調子）
二、作田節

附 早作田節（本調子）
三、組物（本調子）

口説 萬歳カフス節 ウフンシヤリ節 サインソル節

四、仲風節（二上り）

五、大浦節（三下り）

〔音楽〕第一卷十一號 明治四十三年十二月 二〇頁〜二二頁

関連記事が左に掲載される。

「琉球歌に就て」東儀鐵笛

「琉球歌合評」（評者は高野辰之・本居長世・永井素岳・幸堂得知・三宅延齡・竹内平吉）

〔音楽〕第二卷第二号 明治四十四年二月 二七頁〜三二頁

「琉球歌合評に就いて」東恩納寛惇

〔音楽〕第二卷第五号 明治四十四年五月 三五〜三六頁

明治四十三年十一月二十九日（火）幸若演奏（木曾願書・濱出（各一部））／桃井義久

明治四十四年六月十七日（土）於奏楽堂／文弥節演奏（出世景清四段目・國姓爺合戦（貞尽し））／岡本文彌・岡本文司（文彌の弟子）。二十日に再度文彌を招聘して掛員のみで演奏鑑賞。源氏烏帽子折の一部を蠟管に吹き込む）

演奏の前に高野辰之によって文弥節の起源沿革などについて解説があった。梗概（「文彌節に就きて」高野辰之）が『音楽』（第二卷第八号 明治四十四年八月 一八頁〜二〇頁）に掲載される。

明治四十四年七月三日（月）於奏楽堂／金平浄瑠璃演奏（四天王太田合戦

二段目）／五十嵐敬豊／三味線組歌演奏（飛驒組・葛の葉）山口菊次郎（囃託・山口巖）

演奏の前に高野辰之による講演「金平浄瑠璃及三味線本手端手につきて」があり、また散会後に掛室で五十嵐敬豊の金平浄瑠璃「中若鞍馬下り二段目」が語られた。

大正二年六月二十八日（土）於掛室／文弥節演奏（源氏烏帽子折・天神記（各一部））／岡本文壽、一部を蠟管に吹込む。

大正二年九月二十六日（金）声明（天台宗）調査（伽陀、諸天讚、法華讚、嘆、佛名、教化、四智梵讚、吉慶梵讚、百八讚、六道講式）／京都大原魚山宝泉院僧正瀧本深達・高弟竹内道忍。（二十九日蠟管吹込み（竹内）、三十日竹内に再調査）

大正三年六月九日（火）於掛室／薩摩琵琶演奏（宝來宮・石童丸・北白川宮・臺灣入ほか）／岡崎光男

大正五年二月二十五日（金）民謡演奏（安来節）出雲安来節家元渡邊イト・富田徳之助

大正五年五月九日（火）民謡演奏（船唄（屋らい目出度な・新玉の・松は松臺・皇帝・高砂の・やんれ宝來・松揃・みろく））／大和田雄次・大和田藤次ほか四名（下総古河）

大正六年六月十一日（月）於奏楽堂／声明（新義真言宗）講演／真言宗智山派管長大僧正瑜伽教如。一週間行われた。

大正七年六月二十六日（水）民謡演奏（追分節）／石津倉吉（北海道江差町）

大正八年十二月十三日（土）於奏楽堂／義大夫節演奏（鷗山古跡松（中将姫雪實の段）・烏帽子折幸源氏（伏見里の段））／貴田常次郎（囃託・竹本越路太夫）・竹本南部太夫・鶴澤寛次郎・野澤吉兵衛。

（八）出版

『近世邦楽年表』（三冊）および『箏曲集』（二編）が出版されている